

**令和4(2022)年度  
とちぎっ子学習状況調査  
結果分析**



**下野市教育研究所**

**令和4年 11 月**

# 「令和4(2022)年度とちぎっ子学習状況調査」結果分析

令和4年11月  
下野市教育委員会

## 調査について

### 1 調査の概要（「とちぎっ子学習状況調査」実施要項より一部抜粋）

#### (1) 調査の目的

本調査の実施により本県児童生徒の学力や学習の状況等を把握・分析し、児童生徒一人一人の課題を明確にするとともに、各学校が組織的に学習指導における検証改善サイクルの構築・運用に取り組むことにより、本県児童生徒の学力向上に資する。

#### (2) 調査実施日

令和4(2022)年4月19日(火)

#### (3) 調査対象 ※小学校には義務教育学校前期過程、中学校には義務教育学校後期課程を含みます

小学校第4学年、小学校第5学年、中学校第2学年

#### (4) 調査事項及び手法

##### ① 教科に関する調査

- ・小学校調査：国語、算数、理科
- ・中学校調査：国語、社会、数学、理科、英語

##### ② 児童生徒質問紙調査

- ・内容：学習意欲、学習方法、学習環境、家庭学習等
- ・方法：選択回答式
- ・質問数：小学校94問、中学校113問

##### ③ 学校に対する調査

学校における指導に関する取組や学習環境等

#### (5) その他

本調査の結果は、学力の特定の一部であること、学校における活動の一側面であることに留意し、児童生徒の全般的な学習状況への指導・改善等につなげるよう留意する。

### 2 本市の参加状況 ※参加人数は最も多かった教科のもの

調査対象内訳	参加校数	参加人数
小・義務教育学校第4学年	9校	481人
小・義務教育学校第5学年	9校	499人
中学校第2学年・義務教育学校第8学年	4校	517人

# 本市の結果について

※小学校には義務教育学校前期過程、中学校には義務教育学校後期課程を含みます

## 1 概要

### (1) 教科に関する調査の結果

【「令和4(2022)年度とちぎっ子学習状況調査」平均正答率の下野市と栃木県の比較】

- ◎ 大きく上回っている（5ポイント以上）
- 上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- 同程度（±1ポイント未満）
- ▽ 下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- ▼ 大きく下回っている（5ポイント以上）

#### 《小学校》

第4学年			第5学年		
	内 容	県との比較		内 容	県との比較
国語	全 体	○	国語	全 体	○
	基 礎	○		基 礎	○
	活 用	○		活 用	◎
算数	全 体	○	算数	全 体	○
	基 礎	○		基 礎	○
	活 用	◎		活 用	○
理科	全 体	○	理科	全 体	○
	基 礎	○		基 礎	○
	活 用	◎		活 用	○

#### 《中学校》

第2学年					
	内 容	県との比較		内 容	県との比較
国語	全 体	○	社会	全 体	○
	基 礎	○		基 礎	○
	活 用	○		活 用	○
数学	全 体	○	理科	全 体	○
	基 礎	○		基 礎	○
	活 用	◎		活 用	○
英語	全 体	◎			
	基 礎	◎			
	活 用	◎			

# 各教科の結果について



## 1 国語

### (1) 小学校第4学年

◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
— 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

#### ① 教科の正答率

	全 体	基 礎	活 用
県との比較	○	○	○

#### ② 領域別正答率

	知識及び技能			思考力、判断力、表現力等		
	言葉の特徴や 使い方に関する 事項	情報の扱い方に 関する事項	我が国の言語 文化に関する 事項	話すこと・ 聞くこと	書くこと	読むこと
県との比較	○	○	○	◎	◎	○

#### ③ 内容別正答率

	話し合いの内容 を聞き取る	漢字を読む	漢字を書く	言葉の学習	物語の内容 を読み取る	説明文の内容 を読み取る	調べ方について 話し合う	文章を書く
県との比較	◎	○	○	○	—	○	○	◎

#### ④ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に 取り組む態度
県との比較	○	○	○

#### ⑤ 考察

- ・全ての領域別、内容別、観点別正答率において、県平均正答率と同程度か上回る結果となった。
- ・「話すこと・聞くこと」の領域では、自分の考えが相手に伝わるように話す内容を考える問題（活用）、「書くこと」の領域では、段落の役割を理解や指定された条件に合わせて文章を書く力を見る問題（基礎）の正答率が高い傾向が見られた。
- ・物語の内容を読み取る問題では、叙述を基に場面の様子を捉えることに課題が見られた。心情の変化や場面の移り変わりが分かる叙述に着目しながら読み深められるよう、言語活動や発問の工夫が求められる。
- ・昨年度に引き続き、主語と述語の関係を考える問題に課題が見られた。主述の関係を扱う小単元の学習時だけでなく他の単元の学習においても、教材文中の主述の関係に着目させたり、主述の関係に気を付けて文章を書く活動を取り入れたりするなど、継続して学習できる工夫を取り入れていくことが大切である。

(2) 小学校第5学年

◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
— 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体	基 礎	活 用
県との比較	○	○	◎

② 領域別正答率

	知識及び技能			思考力、判断力、表現力等		
	言葉の特徴や 使い方に関する 事項	情報の扱い方に 関する事項	我が国の言語 文化に関する 事項	話すこと・ 聞くこと	書くこと	読むこと
県との比較	—	○	○	◎	◎	○

③ 内容別正答率

	話し合いの内容 を聞き取る	漢字を読む	漢字を書く	言葉の学習	物語の内容を 読み取る	説明文の内容 を読み取る	調査の結果を もとに話し合う	文章を書く
県との比較	○	—	▼	○	—	○	◎	◎

④ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に 取り組む態度
県との比較	○	◎	◎

⑤ 考察

・ほとんどの領域別、内容別、観点別正答率において、県平均正答率と同程度か上回る結果となった。

・「話すこと・聞くこと」の領域では、意見の共通点や相違点に着目して考えをまとめる問題（活用）、「書くこと」の領域では、段落の役割を理解すること、指定された条件に合わせて文章を書く問題（基礎）、内容の中心を明確にし、事実と自分の考えを明確にして表現する問題（活用）の正答率が高い傾向が見られた。

・漢字を書く問題では、3問中全てが県平均正答率を下回った。そのうち2問は県平均正答率を5ポイント以上下回った。誤答に多く見られた傾向は、「①おおよその形は似ているものの、形の一部が異なっているもの」「②送り仮名に誤りが見られるもの」の2パターンであった。新出漢字の習得においては、漢字辞典を用いて、新出漢字の読みや意味などを調べる活動も有効である。漢字のもつ意味を考えながら文章の中で正しく用いることができるようにしていくことが重要になる。

(3) 中学校第2学年

◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
— 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体	基 礎	活 用
県との比較	○	○	○

② 領域別正答率

	知識及び技能			思考力、判断力、表現力等		
	言葉の特徴や 使い方に関する 事項	情報の扱い方に 関する事項	我が国の言語 文化に関する 事項	話すこと・ 聞くこと	書くこと	読むこと
県との比較	○	○	—	○	◎	○

③ 内容別正答率

	話し合いの内容 を聞き取る	漢字を読む	漢字を書く	文法・語句に 関する知識	説明的な文章の 内容を読み取る	文学的な文章の 内容を読み取る	こま遊びについて スピーチする	文章を書く
県との比較	○	○	—	○	◎	○	○	◎

④ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に 取り組む態度
県との比較	○	○	○

⑤ 考察

・全ての領域別、内容別、観点別正答率において、県平均正答率と同程度か上回る結果となった。

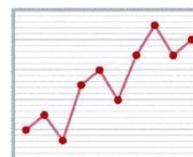
・「書くこと」の領域では、指定された条件に合わせて文章を書く問題（基礎）、考えの根拠となる事柄を資料から読み取り自分の考えを明確に表現する問題（活用）の正答率が高い傾向が見られた。

・「読むこと」の領域では、説明的な文章において叙述を基に文章全体の内容を捉えたり、文章の構成や展開を的確に理解したりする問題（基礎）において、県平均を大きく上回った。

・漢字の問題では、熟語の読み書きの問題は概ね良好であったのに対し、送り仮名を必要とする漢字の読み書きになると正答率が低くなる傾向が見られた。新出漢字の学習では、その漢字の持つ意味や教材文で扱っていない読み方にも目を向けさせ、必要に応じて文章中で用いることができるように指導していくことが大切である。また、漢字を用いることよき気付かせ、日常生活の中で積極的に用いようとする態度も育成していくことで、より確実の習得につながると考えられる。

## 2 算数・数学

### (1) 小学校第4学年



◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
— 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

#### ① 教科の正答率

	全 体	基 礎	活 用
県との比較	○	○	◎

#### ② 領域別正答率

	数と計算	図形	測定	データの活用
県との比較	○	○	○	○

#### ③ 内容別正答率

	大きい数・ 小数・分数	たし算・ ひき算	かけ算	わり算	□を使った 式	円と球・ 三角形	長さ・重さ	時こくと 時間	表とぼう グラフ
県との比較	○	—	○	○	◎	○	○	◎	○

#### ④ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に 取り組む態度
県との比較	○	◎	○

#### ⑤ 考察

- ・全ての領域別、内容別、観点別正答率において、県平均正答率と同程度か上回る結果となった。
- ・「数と計算」の領域での「基礎」を見る問題(文章問題を解くために除法の立式をすること)、「測定」の領域での「活用」を見る問題(2つの時刻の間の時間を求めること、身近にあるものの重さを推察して、適切な単位を使って表すこと)の正答率が高い傾向が見られた。
- ・「図形」の領域での「円と球・三角形」の問題では、円の直径について理解することに課題が見られた。直径は円の中心を通り、円周から引いた直線であることを学習する際に、作図などを通して直径は無数にあることに気付かせるなど、円の直径の意味についての理解を深める数学的活動の工夫が求められる。
- ・「数と計算」の領域での「大きい数・小数・分数」の問題では、「同分母の真分数+真分数=真分数」の計算に課題が見られた。分数の計算の指導に当たっては、単位分数のいくつ分を求めているのかという見方が大切である。図を用いて1Lがどこに当たるのかを確認することの必要性に気付かせることで、分数の大きさの理解につながると考えられる。

(2) 小学校第5学年

◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
－ 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体	基 礎	活 用
県との比較	○	○	○

② 領域別正答率

	数と計算	図形	変化と関係	データの活用
県との比較	○	○	◎	◎

③ 内容別正答率

	億と兆・ がい数の 表し方	わり算・計 算のきまり	小数	分数	いろい ろな形	面積	角の 大きさ	変わり方 調べ	簡単な場 合につい ての割合	折れ線 グラフと 表
県との比較	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	◎

④ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に 取り組む態度
県との比較	○	○	○

⑤ 考察

・全ての領域別、内容別、観点別正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。

・「変化と関係」の領域での「基礎」を見る問題（伴って変わる2つの数量の関係を式に表すこと）、「データの活用」の領域での「活用」を見る問題（2つの折れ線グラフから、必要なことを読み取ること）の正答率が高い傾向が見られた。

・「数と計算」「変化と関係」の領域での「簡単な場合についての割合」の問題では、2つの数量の関係をもとの大きさの何倍になったかを考えて比べることに課題が見られた。2つの数量を比べる際、差で見える場合と割合で見える場合がある。割合で比べる場合には、「もとの長さ」に対する「伸びた長さ」の割合はいつも変わらないことに気付くことができるような数学的活動の工夫が求められる。

・「数と計算」の領域での「わり算・計算のきまり」の問題では、3けた÷2けた＝2けた(余りあり)の計算に課題が見られた。被除数と除数の大きさを相対的に比べることにより、各位の商の見当を付け、商を修正していく手順を丁寧に取り扱うことで、正しく計算できる力を身に付けさせたい。

(3) 中学校第2学年

◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
－ 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体	基 礎	活 用
県との比較	○	○	◎

② 領域別正答率

	数と式	図形	関数	データの活用
県との比較	○	◎	○	◎

③ 内容別正答率

	正の数・ 負の数	文字式	1次方程式	比例・ 反比例	平面図形	空間図形	データの 分布の傾向
県との比較	○	○	○	○	◎	◎	◎

④ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に 取り組む態度
県との比較	○	◎	○

⑤ 考察

・全ての領域別、内容別、観点別正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。

・「データの活用」の領域での「基礎」を見る問題（データの分布の傾向について理解すること）、「図形」の領域での「基礎」「活用」を見る問題（平面図形について理解し作図したり説明したりすること）の正答率が高い傾向が見られた。

・「数と式」の領域での「1次方程式」の問題では、比例式を解くことに課題が見られた。比を基にして数量を求めるような具体的な場面において、比例式をつくり、問題を解決することができるよう、数学的活動の工夫が求められる。比例式を正しく解くためには、比の値が等しいことを利用して方程式に変形すればよいことを理解できるようにすることが大切である。

・「関数」の領域での「比例・反比例」の問題では、関数についての理解に課題が見られた。「比例・反比例」の学習では、表、式、グラフを目的に応じて活用しながら、数の変化や対応の特徴を考察する学習を丁寧に行い、比例・反比例の意味や特徴を理解できるようにすることが大切である。

### 3 理科

#### (1) 小学校第4学年



- ◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
- 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
- 同程度 (±1ポイント未満)
- ▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
- ▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

#### ① 教科の正答率

	全 体	基 礎	活 用
県との比較	○	○	◎

#### ② 領域別正答率

	物質・エネルギー	生命・地球
県との比較	○	○

#### ③ 内容別正答率

	身近な自然の観察	植物の育ち方	昆虫の育ち方	昆虫の体のつくり	太陽と地面の様子	光の性質	風やゴムのはたらき	音の性質	電気の通り道	磁石の性質	物の重さ
県との比較	○	○	○	◎	◎	◎	◎	○	○	◎	○

#### ④ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
県との比較	○	◎	○

#### ⑤ 考察

- ・ 全ての領域、内容、観点において県の平均正答率を上回る結果となった。特に、「昆虫の体のつくり」「太陽と地面の様子」「光の性質」「風やゴムのはたらき」といった複数の内容で県の平均正答率を大きく上回った。
- ・ 「虫眼鏡の使い方」について、虫眼鏡を顔の近くで固定して対象物を動かすことについて理解できていない児童が多い。学年が上がると「虫眼鏡」に代わり「ルーペ」を使用することになるが、使い方は同じである。動植物の観察の際には常に虫眼鏡を持ち歩き、観察する習慣を身に付けるなど、使用する機会を増やして、正しく確実に使い方を理解させることが大切である。
- ・ 物の「重さ」と「体積」の関係についての理解に課題が見られた。種類の異なる物質を同じ重さにして体積の大きさを比較する問題について、体積を同じにして重さの大きさを比較した場合と同じ結果であると解答した児童が多く見られた。授業の実験において、数値上の比較だけでなく、実際に同じ重さで体積の異なる物質を児童自身に比較させ、実感を伴った理解を図ることが大切である。また、体積の概念を、これまでの算数の学習と関連させて理解させることも重要である。

(2) 小学校第5学年

◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
－ 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体	基 礎	活 用
県との比較	○	○	○

② 領域別正答率

	物質・エネルギー	生命・地球
県との比較	○	○

③ 内容別正答率

	1年間の植物の成長	1年間の動物の様子	天気の様子と気温	電気のはたらき	動物の体のつくりと運動	月と星	物の体積と力	物の体積と温度	雨水のゆくえと地面の様子	水のすがた	自然の中の水	物の温まり方
県との比較	○	－	▽	◎	○	○	○	○	○	◎	－	○

④ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
県との比較	○	○	○

⑤ 考察

・ 全ての領域、観点において県の平均正答率を上回る結果となった。内容別では特に「電気のはたらき」「水のすがた」で、県の平均正答率を大きく上回った。

・ 「天気の様子と気温」では、百葉箱についての理解と記録温度計のグラフの読み取りに課題が見られた。どちらも活用する頻度を増やし、実際に何度も利用しながら実感を伴った理解を促す必要がある。特に記録温度計の読み取りについては、グラフの変化と天気の変化とを関係付けて考える体験を意図的、計画的に設けていくことが大切である。

・ 「自然の中の水」では、密閉された容器内の水が「蒸発」した際、容器の外側にも水滴が付くと考えた児童が少なくない。理由の1つに「結露」と「蒸発」を混同していることが考えられる。容器を密閉して数日放置したのは何を確かめるためなのかを考えられるようにすることが大切である。そのためには、授業で実験を行う際に、実験の目的を明確にし、自分の予想が正しかった場合と違った場合にはそれぞれどうなるのか、結果を見通して問題解決を行う経験を繰り返していくことが重要である。

(3) 中学校第2学年

◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
○ 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
— 同程度 (±1ポイント未満)
▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

① 教科の正答率

	全 体	基 礎	活 用
県との比較	○	○	○

② 領域別正答率

	エネルギー	粒 子	生 命	地 球
県との比較	○	○	—	○

③ 内容別正答率

	植物の分類	動物の分類	身のまわりの物質とその性質	気体の性質	水溶液の性質	物質の状態変化	光の性質	音の性質	力の性質	火山	地層	地震
県との比較	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○	◎

④ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
県との比較	○	○	—

⑤ 考察

・「エネルギー」「粒子」「地球」の領域において県の平均正答率を上回る結果となった。内容別では特に、「地震」で県の平均正答率を大きく上回った。

・ルーペの使い方について、ルーペを顔の近くで固定して対象物を動かすことへの理解に課題のある生徒が見られた。小学校の学習内容には、どの学年にも動植物の観察が位置付けられており、その都度ルーペ（または虫眼鏡）を使用してきたが、ルーペは正しい使用方法が定着しない器具の代表である。中学校においても、実際に使用する機会を増やすとともに、小学校時代の経験を想起させながら、改めて使用方法を確認し、正しく定着させることが大切である。

・「火山」では、双眼実体顕微鏡の操作手順の理解に課題が見られた。双眼実体顕微鏡は、生物顕微鏡に比べ使用する場面が少ないので、実際に使用する場面では、確実に正しい使い方を習得させたい。使用する際には、操作手順の意味を理解しながら操作することで正確な技能を身に付けられる。使用頻度の高い生物顕微鏡の使い方を想起させ、共通点や差異点を捉えさせるなどの工夫をすることが考えられる。

## 4 社会

○中学校第2学年



- ◎ 大きく上回っている (5ポイント以上)
- 上回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
- － 同程度 (±1ポイント未満)
- ▽ 下回っている (1ポイント以上 5ポイント未満)
- ▼ 大きく下回っている (5ポイント以上)

### ① 教科の正答率

	全 体	基 礎	活 用
県との比較	○	○	○

### ② 領域別正答率

	地 理	歴 史
県との比較	○	○

### ③ 内容別正答率

	世界の姿	日本の姿	世界各地の人々の生活と環境	世界の諸地域	縄文時代～古墳時代	飛鳥時代～平安時代	中世の日本
県との比較	－	－	○	○	○	◎	○

### ④ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
県との比較	○	○	○

### ⑤ 考察

- ・ 全ての領域別、内容別、観点別正答率において、県平均正答率と同程度か上回る結果となった。
- ・ 歴史分野は、出題された全ての内容において県平均正答率を上回っており、中でも、飛鳥時代～平安時代については県平均を大きく上回り、学習内容の定着が見られた。
- ・ 地理分野において、地図やグラフ等の複数の資料から得られる情報を関連させて社会的事象について考察する設問に課題が見られた。授業では、資料の読み取りに関して資料を提示する際、全体的な傾向を読み取らせるとともに、細部にも着目するような問いを工夫することが大切である。さらに、地理的な見方・考え方（位置や区間的な広がりに着目する等）を働かせ、資料から得た情報を関連付けて考察できるような指導の工夫が求められる。
- ・ 歴史分野においては、県平均正答率を上回っているが、中世における武士の成長に関する設問に課題が見られた。歴史的事象に関わる語句の意味を時代の特徴を踏まえて正確に理解できるような指導が大切である。併せて、子どもたちが歴史的な見方・考え方（時期、推移や変化に着目する等）を働かせ、学習した内容を再構成できるよう発問の工夫も必要である。

## 5 英語

### ○中学校第2学年



- ◎ 大きく上回っている（5ポイント以上）
- 上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- － 同程度（±1ポイント未満）
- ▽ 下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- ▼ 大きく下回っている（5ポイント以上）

#### ① 教科の正答率

	全 体	基 礎	活 用
県との比較	◎	◎	◎

#### ② 領域別正答率

	聞くこと	読むこと	書くこと
県との比較	◎	◎	◎

#### ③ 内容別正答率

	リスニング (内容理解)	リスニング (対話文の 応答)	リスニング (さまざま な英文の 聞き取り)	語形・語法 の知識・理解	語彙の 知識・理解	さまざま な英文の 読み取り	長文の 読み取り	単語の 並べかえに よる英作文	場面に 応じて書く 英作文	情報に 基づいて 書く英作文	4文以上の 英作文
県との比較	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎	○	◎	◎	◎

#### ④ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に 取り組む態度
県との比較	◎	◎	◎

#### ⑤ 考察

- ・ 全ての領域別、内容別、観点別正答率において県平均を上回る結果となった。
- ・ 対話文や英文の情報を正しく聞き取ったり読み取ったりする問題や、語形や語法を理解しているかを確認する問題、与えられた情報に基づいて書く英作文の問題については、正答率は高い傾向が見られる。今後も、目的や場面、状況に応じた言語活動を設定することで、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」を一体的に育む学習活動を充実していただきたい。
- ・ 「英文を聞き取り、尋ねられたことに対して自分の考えを英語で答えることができる」（「聞くこと」の領域）、「対話の流れに合った英文を書くことができる」（「書くこと」の領域）問題は、ともに無解答率が3割程度に上っている。また、「読むこと」の領域においても、「読み取った内容を踏まえて対話文を完成することができる」問題の正答率が低い結果となっている。予め準備しておいた自分の考えや伝えたい内容を話したり書いたりする活動だけでなく、聞いたり読んだりしたことに対して、相手の意向を踏まえて自分の考えを述べるなど、実際のコミュニケーションの場面を想定した学習活動を意図的に取り入れていくことが求められる。

# 児童生徒質問紙調査の結果について

## 1 概要

質問別肯定率が算出できる項目や、読書、学習時間等における項目での「全くない」以外の回答率より県平均との比較を行った（小学校:88項目、中学校:107項目）。小学校第4学年では49項目、第5学年では56項目が同程度または上回る結果となった。中学校第2学年においては、85項目が同程度または上回る結果となった。

## 2 各学年の結果

### (1) 小学校第4学年

#### 【特に良好な結果となった項目】

授業で自分の考えを文章にまとめて書くことはむずかしい
新聞を読んでいる
授業の最後に、学習したことを振り返る活動をよく行っている
次の教科などの学習は好きですか。総合的な学習の時間
学級活動の時間に、友達同士で話し合っってクラスのきまりなどを決めていると思う

#### 【課題が見られた項目】

分からない国名や地名があったら、インターネットや地図帳などを使って調べている
本やインターネットなどを利用して、勉強に関するじょうほうを得ている
家で、学校の授業の復習をしている

### (2) 小学校第5学年

#### 【特に良好な結果となった項目】

新聞を読んでいる
漢字の読み方や言葉の意味が分からないときは、辞書を使って調べている
授業であつかうノートには、学習の目標（めあて・ねらい）とまとめを書いている
先生は学習のことについてほめてくれる
授業の最後に、学習したことを振り返る活動をよく行っている

#### 【課題が見られた項目】

家で、学校の授業の復習をしている
家で、テストでまちがえた問題について勉強をしている
授業では、クラスの友達との間で話し合う活動をよく行っている

### (3) 中学校第2学年

#### 【特に良好な結果となった項目】

新聞を読んでいる
漢字の読み方や言葉の意味が分からないときは、辞書を使って調べている
授業の最後に、学習したことを振り返る活動をよく行っている
次の教科などの学習は好きですか。 英語
授業で扱うノートには、学習の目標（めあて・ねらい）とまとめを書いている

#### 【課題が見られた項目】

家で、自分で計画を立てて勉強をしている
学習して身に付けたことは、将来の仕事や生活の中で役に立つと思う
家の人は、あなたがほめてもらいたいことをほめてくれる

- ・小、中どちらの調査においても、「新聞を読んでいる」「授業の最後に、学習したことを振り返る活動をよく行っている」の項目について、肯定的回答の割合が県の平均回答率を大きく上回った。
- ・「新聞を読んでいる」の項目では、「週1～3回読んでいる」と回答した児童生徒の割合が県の割合を大きく上回った。各校では、工夫して新聞の日の取組を継続していただいているが、新聞の日以外でも新聞を読む機会が増えており、児童生徒の関心を高めることにつながっていると考えられる。
- ・授業の最後に、まとめや振り返りの活動を設けることは定着してきていると考えられる。学校においては、児童生徒自身が1時間の学習状況を確認し、今後の学習の見通しを立てられるようなまとめや振り返りの在り方について、今後も研究を続けていただきたい。
- ・小、中学校調査ともに、家庭学習に関する質問について県の肯定的回答率を下回った項目が見られた。各中学校区では、家庭学習への取組を強化する期間を統一して設けるなどの工夫をしていただいております。児童生徒の意識付けにつながっている。今後も、メディアを活用した情報の収集や、定着が不十分な内容の補充学習など、児童生徒が自ら学習内容を工夫し、計画的に取り組むことができるよう働き掛けをお願いしたい。

今後、分析結果を学習指導や生活指導の工夫改善等に生かし、児童生徒のさらなる学力向上につなげていきます。